

議員視察報告書

赤穂市議会
釣 昭彦 議長 様

議員氏名	<u>山田 昌弘</u> ⑩
〃	<u>奥藤 隆裕</u> ⑩
〃	<u>西川 浩司</u> ⑩
〃	<u>釣 昭彦</u> ⑩

下記のとおり、行政視察・講演会等に参加しましたので、報告します。

記

1. 実施日 令和元年11月5日(火)～11月6日(水)
(2日間)
2. 調査地及び調査項目(詳細については別紙のとおり)
 - (1) 神戸市 ドナルド・マクドナルド・ハウス神戸
・施設の運営と経営について
 - (2) 神戸市 神戸アイセンター
・アイセンター構想について
・視覚障害補助器具の疑似体験
 - (3) 朝霞市 朝霞市健康増進センター(わくわくドーム)
・施設の運営と指定管理者制度について

(別紙)

新風視察報告書

【視察地】神戸市「ドナルド・マクドナルド・ハウス神戸」

【視察日時】令和元年11月5日 10時～11時

【視察目的】

ドナルド・マクドナルド・ハウス神戸は「兵庫県立こども病院」に隣接する宿泊施設である。こども病院に入院している子供の家族が1泊1000円という格安の価格で宿泊することが出来る。ドナルド・マクドナルド・ハウスはその名前からわかるように日本マクドナルド社が積極的な支援を行っている。

今回は山田議員の知人の紹介で視察を行うことになった。赤穂市民病院の経営のありかたの参考になればということであった。

【説明内容】

(1) 施設の概要について

この施設は神戸市ポートアイランド 兵庫県立こども病院に隣接している。主に入院している子どもの親族が利用する。開設は2016年5月で、日本のマクドナルドハウスとしては、11番目のオープンである。

設立に関しては、土地と建物は県の負担で建てられている。部屋数は16室で2018年の利用実績は 利用家族 682家族 総宿泊日数 4680人である。

職員1名とサポーター3名で運営を行っている。部屋や施設の掃除は246名の登録ボランティアがシフトを組んで行っている。

職員は公益財団法人ドナルド・マクドナルド・ハウスの従業員である。施設の運営の性格上、職員はボランティアとの人間関係を良好に保つのが大切である。また、寄付をしてくれる企業との関係も大切である。従って職員の転勤はあまりないとの事であった。

ボランティアは無償であるが、遠方からのボランティアについては交通費が出る。食堂は無いがキッチン・ダイニングがあり、そこで調理することは可能である。企業等から様々な食材(レトルトカレー、ラーメン、米、調味料等)の提供を受けており、宿泊者はそれを自由に使うことが出来る。

(2) 収支について

収入合計は約1600万円で、その内訳は利用料収入：約700万円
寄付：約830万円、会費31万円 等である。会費はサポートの会のメンバーが一人当たり年間3000円を納める。寄付については地元企業を中心に集めている。利用者からの寄付も多い。

支出は1600万円で、その内訳は給与約900万 水道光熱費約400万円
その他約300万円である。

(3) 今後の課題

収支の内容を見てもわかるように、この施設はボランティアと寄付によって成り立っている。寄付を増やすためには知名度を上げることが大切である。認知度は現在33%でこれを上げていくのが課題であるということであった。知名度向上の為に様々なイベント等を行っている。

【所感等】

マクドナルドハウスの発祥の地はアメリカ フィラデルフィアである。あるフットボール選手が自身の体験からこのような施設の必要性を痛感し、地元の新聞社に働きかけ、土地、建物の提供を受けた。そして、この活動に共感したマクドナルドの店長たちがその運営を支援した。それがこの事業の発端である。世界第一号のハウスの開設は1974年である。

日本では、1996年（平成8年）に日本マクドナルド社の当時の社長であった藤田田氏が国立大蔵病院長の要請を受け、第1号のハウスを東京都に開設している。その後、現在までに12のハウスをオープンしている。

ハウスの経営は発祥の経緯から分かるように、ボランティア意識が高く、寄付の文化が根付いているアメリカの風土に基づいている。日本でもハウスの経営はアメリカと同じように寄付とボランティアが重要な役割を担っている。

このような施設が少しずつであるが増えてきたのは、日本でもボランティア意識と寄付の文化が根付いてきたという証拠かもしれない。

寄付とボランティアが集まりやすいのはその対象が病気の子供の家族という共感を得やすいものであるというのが理由の一つとであろう。また、マクドナルドがハウスを全面的に支援しているのは、ファストフードに対する悪いイメージを払拭したいという戦略もあると思われる。

言葉は悪いかもしれないが、企業と個人のボランティアをうまく利用する。そのための側面支援、寄付をしやすい態勢づくり、というのがこれからの行政の一つの課題となるのかもしれない。

【説明者】 ドナルド・マクドナルド・ハウス神戸 後藤典史

【視察地】 神戸市 「神戸アイセンター」 及びアイセンター内「ビジョンパーク」

【視察日時】 令和元年11月5日（火） 11時～12時30分

【視察目的】

神戸アイセンターは神戸医療産業都市の中にある施設である。当センターは神戸市民病院機構の眼科専門の病院と理化学研究所の研究施設を中心した医療センターである。その2階に公益社団法人「NEXT VISION」がある。「NEXT VISION」はロービジョンケア、リハビリ、社会復帰の支援などを行っている。

NEXT VISIONの設立発起人は 世界で初めてIPS細胞を利用して網膜の細胞の移植を成功させた高橋政代氏である。

今回の視察ではNEXT VISIONが掲げる、アイセンター構想について学んだ。

また、実際に、最新の視力矯正機器を体験し、その購入に対する地方自治体の助成についても聞き取りを行った。

【説明内容】

(1) アイセンター構想について

①アイセンター構想の理念

視覚障害者のなかで全盲の人はその1割程度で、ほとんどの視覚障害の人は適切な治療と根気良いロビージョンケアにより、社会で十分に活躍できるポテンシャルを秘めている。アイセンター構想においては視覚障害の研究から障害者の雇用までを一気通貫に取り扱うことによって患者の社会復帰を応援する。

「支えられる人を 支える側の人に」がそのスローガンである。

②事業内容

このアイセンター構想は

基礎研究⇒応用研究⇒臨床検証⇒治療⇒ロビージョンケア⇒リハビリ⇒雇用の流れを一気通貫に行うために作られた。

その為、アイセンターは 企業、研究所、教育機関、行政、患者団体、福祉施設が一堂に会する場所になっている。

具体的な事業内容としては下記の10項目である。

1. 視覚障害者に社会参加活動に対する支援事業
2. 視覚障害者のリハビリテーションに対する支援・技術開発事業
3. 眼科領域における調査・研究・検査事業
4. 視覚障害を有する者および及び眼科領域における教育を必要とする者への奨学金の給付・貸付事業
5. 視覚障害を有するスポーツ・芸術その他の活動を行う者への活動支援事業
6. 視覚障害および福祉に関する指導・教育活動
7. 視覚障害者の支援に必要となるボランティアの募集・教育・派遣事業
8. 視覚障害者支援団体に対する施設等の貸与事業
9. 視覚障害者支援団体の活動に対する助成事業
10. その他法人の目的を達成するための必要な事業

【実地体験】

ビジョンパークにおいて視覚障害補助器具の体験を行った。

(1) オーカムマイアイ2 (イスラエル製 価格60万円)

100円ライター程度の大きさの機器でメガネのつるに取り付けて使用する。

機能は ①指さした文書の読み上げ ②顔や物を認識し、音声で知らせる。特に記憶させておいた人の名前、紙幣の種類 色などを知らせることができる。

現在、神戸市では自己負担が半額になる助成制度がある。松坂市でも助成制度を作る動きがある。

(2) HOYA MW10 HiKARI (暗所視支援眼鏡：日本製 価格39万円)

夜盲症の人向けの暗視眼鏡。夜盲症の原因である網膜色素変性症は数千人に1人の割合で発症するといわれている。現段階では確実な治療方法は確立されていない。

熊本県天草市で福祉用具「日常生活用具」の給付対象になっている

(3) NeoContrast (日本製・三井化学)

特定の波長をカットする技術により、はっきりとした快適な視界をつくる眼鏡

(4) OTON GLASS (日本製 価格19万円の予定)

オーカムマイアイ2と同様 文字を読み上げる眼鏡。プロトタイプが完成。現在モニターを募集中。眼鏡メーカーの JINSがフレーム開発について提携している。

【所感等】

講義を受けたビジョンパークはアイセンターのエントランス部分にある視覚障害者向けの総合支援エリアである。患者の立場になってみるとこのように診察、治療からリハビリ、就労支援等が一か所で行われるというのは非常に有難い事だと思う。

普通、このような施設は当然のようにバリアフリーになっている。しかし、ビジョンパークは逆に段差とか高低差を多用した空間になっている。

私たちが一步外へ出ると、バリアフリーな場所ばかりではない。その様な世界に適應できるようなケア、サービスを提供しなければならない。そういう考え方が根底にあるとの事であった。また、この空間を使ってデバイスの開発なども行うことも想定している。

1時間程度の説明を聞いてアイセンター構想の全体像が把握できたとは思っていない。しかし、説明の中にあつた「支えられる人を 支える側の人に」というアイセンターの理念には納得させられた。

近視、遠視、白内障の例を考えるまでもなく、目の障害というのは前述の理念を実現するのに最も適した分野であると言える。IPS細胞を利用した網膜細胞移植も白内障手術のように将来は安価に手軽に出来ることを目指しているとの話であった。

興味深いのは、「オーカムマイアイ」にしても「HOYA MW10 HiKARI」にしても元になる技術は視力障害の為に開発されたものではないということである。今後AR、VRの技術がこの分野を飛躍的に発展させる可能性があると思った。

アイセンター構想の考え方は視力障害だけでなく他の様々な障害・病気に対しても適用できる。様々なデバイスの開発が我々の障害にというものについての考え方を変えてしまう可能性がある。今回の視察では将来の医療・病院のあり方が見えたような気がする。

【説明者】 公益社団法人EXT VIS10N事務局長 山田千佳子
神戸アイセンター病院 事務局長 山崎茂樹

【視察地】朝霞市 朝霞市健康増進センター（わくわくドーム）

【視察日時】令和元年 11月6日（水） 10時～12時

【視察目的】

朝霞市健康増進センター（わくわくドーム）は各種の温水プール、リフレッシュルーム、トレーニングルームを完備している健康センターである。

平成26年からは明治スポーツプラザが管理を行っている。現在の状況は市民からの評判も良く、経営的にも良好である。その為、平成31年度は指定管理料の引き下げを行う予定である。

赤穂市も様々な事業で指定管理者制度の導入を行っている。我々も市民から指定管理者に対する苦情を聞くことがある。（特にスポーツ施設に関して）その中には指定管理者だけの努力ではどうにもならない事もあるように思う。

朝霞市の健康増進センター（わくわくドーム）には指定管理制度のあるべき姿について学ぶ為に視察を行った。

【説明内容】

（1）施設概要

施設利用開始時期：平成6年（1994年）7月

施設の目的：市民の健康維持、増進と体力づくり。利用者相互のふれあい。

施設内容：温水プール、リフレッシュルーム、トレーニングルームを完備

敷地面積：9,336㎡ 駐車場236台（隣接する総合福祉センターと共有を含む）

建物構造：建物面積4,153㎡ 延べ床面積 6,593㎡

建物構造地下：1階 地上3階

建築費用：建築物・設備費用 45億円 用地代金 10億円

（2）設備内容

・プール設備

①25m×5コース ②流水プール 幅4m外周110m

③幼児プール 50㎡ ④リハビリプール 42㎡ ⑤ジャグジー

⑥機能回復訓練室外

・トレーニング関係設備

① トレーニングルーム：180㎡ ②エアロビクススタジオ：148㎡

③ ランニングコース：120m

・リフレッシュルーム関係設備

①浴室 温水浴 冷水浴 寝浴 サウナ ②プール見学席

（3）収支

収入：指定管理料金 16270万円 利用料金 7332万円

事業収入 3636万円 その他 1401万円 収入合計 28640万円

支出：人件費 11751万円 事務費 580万円 事業費 2226万円

管理費11187万円 支出合計 25745万円

収入－支出＝2894万円

黒字の場合その8割を市に返還する契約である。

（4）その他

・指定管理者：明治スポーツプラザ（5年契約現在2期目）

(平成6年～17年は施設管理公社が運営 平成18年より指定管理に移行)

- ・市の担当課：朝霞市健康づくり課
- ・利用料金：プール400円 トレーニングルーム200円
リフレッシュルーム500円
- ・その他：自主事業として ヨガ・エアロビ・体操教室・太極拳・水泳教室などを実施しており、延べ参加人数は6,439人になる。

【所感等】

この施設の計画はバブルの頃になされたらしく、その頃の雰囲気は何われる 豪華な建造物である。外形は朝霞市の名産であるニンジンイメージしたと説明を受けたが、私にはむしろ巨大な豪華客船に見えた。

平成18年指定管理を導入するまでは施設管理公社が運営を行っていた。当時市から2億円ほどの支出があったようである。現在、市が支払っているのは差し引き1億5千万程度なので大幅な経営改善がみられている。

興味を引いたことは通路にガチャガチャを設置していることである。これはその売り上げにも期待しているが むしろ子供達がそれを楽しみに来てくれることを目的としているとのことであった。また、イベントで無料でポップコーンを配ったりしている。このような顧客重視の考え方は民間の事業者ならではの発想と思う。

ただ、やはり公営施設なので宣伝には苦勞しているようである。1度チラシを配って民間の業者からクレームが来たことがあるらしい。

不幸なことに平成26年にプールで死亡事故があった。監視の人の引継ぎのタイミングとか不幸な偶然が重なったことがその理由である。

しかし、私の見るところ このプールは見た目は良いが 監視には不適な構造になっているように思う。部屋の中央部に大きな柱があったり、滝があったり、周辺を流水プールが曲がりくねって流れていたりして死角が多い。その為、監視員を7名(夏場は8名)も置いているとのことであった。

プールのアルバイトは全員で100名～200名いる。心肺蘇生の研修を行ったり、排水口を1日3度点検するように義務づけたり、特に安全には気をつけている。

利用料金については プリペイドカードを買くと1割引になる。しかし赤穂市のプール・ジムのような年間パスポートの制度は無い。採算性を考えるとこのようなものは必要ないということなのだろう。

この施設の担当課は、健康づくり課である。生徒の水泳競技の場として使用することもあるがそれがメインではないとのことであった。あくまで施設の目的を市民の健康増進と交流の場として考えている。赤穂市でもスポーツ施設を教育委員会が担当するのが果たして望ましいのか一考を要すると思う。

正直に言うと今回の視察では、赤穂市と比較して、その建物・設備の豪華さに圧倒された。利用者が月に1万数千円ほど払う私設のスポーツクラブとそん色はないのではないかな。

設備・建物はともかく、赤穂市として学ぶべきことは市民が楽しめる、交流する場所を提供するという考え方であろう。

【説明員】

朝霞市健康増進センター館長：相馬 靖和 (株式会社明治スポーツプラザ)

朝霞市こども・健康部 健康づくり課課長：金子 一彦

朝霞市こども・健康部 健康づくり課予防係長：奥野 猛

朝霞市こども・健康部 健康づくり課主任：八田直也